

教育改革再考—「教育改革の幻想」を通じて

1. はじめに

教育をどう改革するかが盛んに叫ばれている。が、それは本当に必要なものなのか？ 印象論に基づいて教育の改革を求めているのではないだろうか。その前提を検証し、教育改革の幻想を振り払うことを目的とした書である。

今回は本書の内容をざっと追い「教育改革に関する幻想」を認識した上で、それに対してこれから行える策を考えてみたい。

2. 曖昧な教育用語の定義

1 回生企画の初っ端を務めるということで、以後の議論が円滑に進むよう、新指導要領における語義が曖昧な言葉について、ある程度の意味を説明しておこうと思います。

2.1. 生きる力

目的語を補えば、「変化の激しいこれからの社会を」生きる力である。生きる力には知力・体力の 2 つの側面が存在する。

我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。

たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を生きる力と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。

2.2. ゆとり教育

(従来の) 知識偏重・詰め込み教育に陥っているという旧文部省の問題意識に基づき、学習内容の削減や意欲・関心の重視を通じて、学習にゆとりや充実感を持たせることで、子供の多様な能力を伸ばすことを目指す教育である。

すなわち、知識偏重型教育とゆとり教育型教育は対立関係として捉えられているということである。

2.3. 総合的な学習の時間

知識をただ教えるのではなく、自ら学ぶ姿勢を身につけることを目的とした時間のこと

「総合的な学習の時間」は、これまでとかく画一的といわれる学校の授業を変えて、

1. 地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間
2. 国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習が行える時間

として新しく設けられるものです。

この時間では、子どもたちが各教科等の学習で得た個々の知識を結び付け、総合的に働かせることができるようにすることを目指しています。

2.4. 新しい学力観（新学力観）

前述の「生きる力」を養うため、知識などに対して、二次的な位置づけにあった関心・意欲・態度を学力の中心においた学力観のこと。

これに基づき、指導内容も、体験的学習や問題解決的な学習や地域独自の施設などを活用した学習などを積極的に取り入れ、子供の個性を生かした授業が求められるようになります。

子供の主体的な学習活動が期待されるようになり、教師も「児童生徒の学習の援助者としての立場」に立つことも求められるようになりました。

<http://homepage2.nifty.com/murasueyusuke/shingakuryokukan.htm> より

- 子供の欲求の充足や個性発揮，その子なりの自己実現を何よりも大切にした授業
- 学習者である子供が主役で，教師は支援・援助に徹し，子供と共に創り上げる授業
- 子供の実証的・帰納的な思考や発想が生かされる問題解決的学習型の授業
- 子供の操作や実体験を重視し，拡散的なオープンエンドの授業
- 同より異を求め，子供の提案や選択の余地のあるオーダーメイドの授業

学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、普遍的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

3. 教育改革実行の背景とその問題

3.1. 従来の教育を知識偏重として否定的にとらえる見方

今の教育はまずいという認識 (p. 8)

学校の理解度における七五三状態（現在は小学生で 3 割、中学生で 5 割、高校生で 7 割の子が「授業がわからない」という状態）が問題に→内容を減らし、基礎的な理解を十分にさせてゆとりや興味・関心をもたせよう→データは期待とは逆のベクトルを向いた (p. 19, 49)

悪としてとらえられていた知識偏重型教育にそれほど苦しめられてなかった当時の受験生達 (p. 102)

3.2. 子供中心主義にみられる教育改革の理想

- ルーツはカリフォルニアに在り (p. 163)
- 教員は「援助者」としてアプローチ (p. 149)
- ロマンティシズムが子供中心主義を魅了的にする (p. 150)
- 「学習は難しいことや、楽しくはないが大事なことがも含まれる」 (p. 170)
- しかし、現実には知識が足りずに体験が成り立たない (p. 175)
- 中教審答申の「新しい学力感」にみる知識の軽視（「体験」の重視） (P. 159)
- 基礎的知識は簡単には陳腐化しない

今日の変化の激しい社会にあって、いわゆる知識の陳腐化が早まり、学校時代に獲得した知識を大事に保持していれば済むということはもはや許されず、不断にリフレッシュすることが求められるようになっている。生涯学習時代の到来が叫ばれるようになったゆえん

4. 対策案

4.1. 教員養成機関のイノベーション

教員養成機関や養成課程も必要性に応じ変革していくべき

教員の質の確保が急務

現在は制度改革に向けて次の制度が検討されている（[「これからの教育を語る懇談会」\(第一次まとめ\) について](#)より）

- 教員免許の更新制度の導入
- 教員養成の専門職大学院の設置促進
- 優秀な教員の処遇と評価の改善

5. おしまいに

抽象論ではなく、文科省が目標とする教育像というのはどのようなものなのでしょうか。現行の教育指針は「子供に自ら判断し、自らが問題解決能力を養 わせる」ところにあると文科相は仰るが、それ以前に彼ら自身が現状分析をうまくできずに印象論で改革を進め、問題を悪化させてしまったのはなんとも頼りない限りである。

新学力観に端的に表れている今の文科省の教育指針（子供中心主義）、「子供が中心になり子供と共に作り上げていく授業」、というのはなんとも耳障りがよい言葉です。しかし、それが現実に実現できるのかとまず疑ってみる姿勢を忘れてはならないと再認識させられます。

【参考文献・参考ウェブサイト】

刈谷 剛彦『教育改革の幻想』筑摩新書 2002 年

刈谷 剛彦『大衆教育社会のゆくえー学歴主義と平等神話の戦後史』中公新書 1995 年

報道発表一覧一文部科学省

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm